

以下、ローマ・カトリックが報じたブナイ・ブリスの、パリ大会(1938年)でのスピーチである。

ブナイ・ブリスは、1843年10月13日、ニューヨークでヘンリー・ジョーンズ、他11名により設立された、現在も活動しているものでは世界最古のユダヤ人の互助組織と言われる。

内容については、真偽を保証できないが、世界の实情と合致している。

なお、カルヴァンをユダヤ人の陰謀の一部とする箇所は、ローマ・カトリックの創作である。

カルヴァンは、自らの説の根拠を聖書と教父たちに求めているからである。

「プロテスタントの改革主義者たちを『伝統的なキリスト教の教義に新しい思想を導入した』と非難するローマ・カトリックの反対派に対して、ジャン・カルヴァンは二つの点で反論した。まず、ローマ・カトリックが何世紀にもわたって忌むべき教義を新たに追加してきた事実を指摘した。次に、プロテスタントの神学は、けっして新しい教義ではなく、ローマ・カトリック自身が崇拝しているまさにその同じ教父によって支持された『聖書の教義』への回帰であることを証明した。」(*The Magazine of the Sovereign Grace Union*, 2013:2)

<https://irp-cdn.multiscreensite.com/81fb15b2/files/uploaded/PT2013-2.pdf>

カルヴァンがタルムードユダヤ教を唱えたという人は、具体的な文言を提示し、証明していただきたい。

## ブナイ・ブリスのパリ大会(1938年)でのスピーチ

異邦人たちの間に社会秩序の道徳的概念が残っている限り、そしてすべての信仰、愛国心、尊厳が根絶されない限り、われわれの世界支配は実現しないだろう。

…愚かな異邦人は、予想以上に騙されやすいカモであることを自ら証明してきた。彼らに知性と実用的な常識を期待する者もいるかもしれない。しかし、彼らは羊の群れである。われわれの牧場で草を与え、将来、われわれの世界の王に“いけにえ”として献上できるようになるまで、肥え太らせよう。

…われわれは多くの秘密結社を設立してきた。これらはすべて、われわれの命令と指示の下で、われわれの目的を実現するために働いている。われわれは、その組織(フリーメイソンなど)に異邦人たちが加わることを名誉、大いなる名誉としてきた。そして、われわれの金(ゴールド)によって、これらの組織はかつてないほど繁栄している。

しかし、異邦人たちは、われわれの陰謀に加担することによって自らの最も貴重な利益を失っている。これらの組織がわれわれの創作であり、われわれの目的を実現するために機能していることを、彼らに悟られてはならない。これは、われわれだけが知る秘密なのである。

フリーメイソンの多くの偉業の一つは、ロッジのメンバーになった異邦人たちに、以下の事実を気づかせないことにある。すなわち、

(1)彼らは自分の牢獄を作るために利用されている。(2)その牢獄のテラスに、われわれは、世界を支配するユダヤ人の王の玉座を据える予定である。(3)われわれは、彼らに、将来世界を支配するわれわれの王に仕える奴隷となるための鎖を作らせている。

…われわれは、子どもたちに“キリストの体(教会)”への加入を勧めてきた。「内部でスキャンダルを起こし、効率よく教会を破壊せよ」とはつきり指示してきた。

「あなたの子供たちの何人かを大砲にきなさい。彼らは教会を破壊できるだろう」。われわれは、このユダヤ人の君子の賢明な助言に従った。不運にも、必ずしもすべての「改宗」ユダヤ人が自らの使命への忠実を証明してきたわけではない。その多くはわ

われわれを裏切った! しかし、約束を守り、自らの言葉に忠実だった者もいる。かくして、長老の助言の正しさが証明された。

われわれは、結果的に不利益をもたらしたものも含め、あらゆる革命の父である。われわれは、平和と戦争の至高の達人である。われわれは、宗教改革の創始者であることを誇る事ができる!

カルヴァンはわれわれの子供たちの一人だった。彼はユダヤ人の子孫であり、ユダヤ権力からの信任と、ユダヤ人による財政支援のもとで、宗教改革における自らの計画を策定した。マルティン・ルターは、無意識にユダヤ人の友人たちの影響に屈し、同じようにユダヤの権力と財政力のもとで、カトリック教会に対する陰謀を成功させたが、不幸にも、欺きに気づき、われわれにとって脅威となった。そのため、われわれは、われわれに逆らう多くの者と同様に、ルターを処分した。...

米国を含む多くの国は、すでにわれわれの企みによって、籠絡されている。

だが、キリスト教会はまだ生きている。...われわれは、それを即時かつ無慈悲に破壊しなければならない。世界中のほとんどの報道機関は、われわれの支配のもとにある。それゆえ、キリスト教会に対する世界の憎悪を、暴力的な方法で増幅すべきである。

異邦人たちの道徳を破壊する活動を強化しよう。革命の精神を人々の心に植え付け、それを広めよう。愛国心や家族愛を軽蔑し、信仰を欺きとみなし、キリストへの服従を下劣な奴隷状態と考えるように導こう。そうすれば、彼らは教会のアピールに耳を貸さず、「ユダヤ人を警告せよ」との教会の訴えを無視するようになるだろう。

まず、クリスチャンの一致の努力や、ノンクリスチャンの教会への加入を妨害すべきである。さもなければ、われわれの支配にとって最大の障害[つまり、教会]は強くなり、われわれの努力は水泡に帰すだろう。われわれの陰謀は暴露され、異邦人たちはわれわれに復讐し、彼らに対するわれわれの支配は決して実現しないだろう。

次の事実を忘れてはならない。すなわち、(1)キリスト教会の敵がまだ積極的に活動している限り、われわれは、世界の支配者になるという望みを抱き続けることができる。...(2)キリスト教が減び去らない限り、未来のユダヤ人の王が世界を統治することはない。...

(London Catholic Gazette, February, 1936; and in Paris Le Reveil du Peuple).